

「新」(1) 168F 紀上 110P 注 7
天つぎ 改行

紀上 111
天つぎ 改行

2574 1/2
「まず」次頁 9行

「二所の宇麻」
伊勢神宮と宇佐神宮
日本書紀大観 559P 3363-3/6
赤 256P

おいて既述)

三女神、宇佐嶋から宗像へ
それでは一体何時、古事記の記載通り、
① 奥つ宮に、多紀理毗売命(田心姫命)
② 中つ宮に、市寸嶋比売命(市井嶋姫命)
③ 近つ宮に、田寸津比売命(端津姫命)
という順に三女神が鎮座されることになった
のたろうか。
身は定かならなかる筈がない。
か、この物語では、概略次のように考
えてみたい。
日本書紀四神代上第六段一書第三
を見てみると、三女神
三の女神を以ては、葦原中国の宇佐嶋に
降り居さむ。今、海の北の道の中に在す。
號けて道主貴(道中の神の意)と曰す。云々
と記されてゐる。(第332回へ三女神像参照)
尚、宇佐嶋について、諸書、豊前国
宇佐郡の宇佐と解し、通証に「(松下)見林曰く宇佐
島非海島二川周流神山故有島名」とある。
(「日本書紀」日本古典文学大系、岩波書店
一一〇頁注七)「荒筋」第二編「八幡神」に

・カラー

・左頁の上半分。上へお出し、

大きく
載せて
下さい。



2,574^P-3/2

14,991^P-2/2

伊弉諾神社



1409 第332図

三女神像

1109 (宇佐神宮蔵)

1309

『宇佐神宮』神社紀行、6、学芸研究社、2002年12月19日発行、19頁参照

2658-5/5
2561未
2,575P-1/2

天つき
改行

「新」(1)-156頁に83と
亀山・宇佐への遷座は、お分後

あるいは、三女神は、
天照大神および
馬城峯山頂へ天降された
鳥状の宇佐嶋へ遷座以前
の地へ降ってゆかれた
馬城峯山頂から
の地へ降ってゆかれた
（第9表参照）
つまり、
三女神は、天上の国から、先ず宇佐国へ天
降り、その後さらに宗像の地へ降って
ゆかれた。
②この三女神は、辛卯年（三三一）以後、水
沼君がお仕えしてきたもとの三女神に代って
鎮祭されることになり、この時より後、
奥つ宮に、多紀理毗売命（田八姫命）
中つ宮に、市寸嶋比売命（市杵嶋姫命）
辺つ宮に、田寸津比売命（瑞津姫命）
が鎮座された
という経緯があったのかも知れない
（時期）についてあえて記せば、
その

② 2568 - 1/2 24 375° / 18

④ 2577¹⁻³ 龍王 天照大神 今 2319¹ 紀王 106¹
49 海水

⑤ 2643^P 言事 816¹

OK 28 cm

2576^P - 1/3

福岡県の史 かんが 歓迎 488^P
末の69^P 年行事

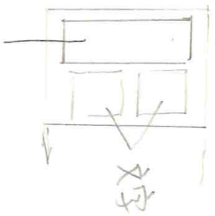
はたの力 なるが 1237¹ 実ば「西南」

はたの力 なるが 1237¹ 実ば「西南」

はたの力 なるが 1237¹ 実ば「西南」

玉取祭（玉せせり）
宗像の決闘を離れた船団は、黄色の旗を
なびかせながら西へと漕ぎ進み、やがて箱崎
宮崎とも書くの浦（もと芦津浦といた）
へ凱旋した。
白砂青松の箱崎の決闘千代ノ松原は、歓
迎一色に沸きかえり、歓呼の聲が、あたりを
覆いつくした。（「帝国地名辞典」太田為三
郎、名著出版、箱崎参照）
そして、辛卯年（三三一）の翌年の正月を
（直径28cmほどの陰と陽の二つの玉のうち、陽玉のみ）
迎えた。
それは、正月三日で、であったろうか。
正月を祝う群衆が、一際大きく響
めいた。
倭王・忍穂耳尊（応神天皇）は、あの戦勝
の大きな喜びを倭国の者達皆と分かち合うため
龍王曰天照大神の荒魂、朝満瓊を、若
者達の手に授けられた。
海水で身を淨め、真白の禪を締めた男達が、
ひたすら王を追ひ求め、寒風の中、休から

・カラー
 ・頁の左端(オエガ
 右端)に、
 上下に長く
 掲載下さい。



写真と縦表に
 配置する。

2,576^p - 2/3



1309 かい 写真図版 421 宮崎宮 王取祭 (王はせせり)
 1409 査推宮・宮崎宮 神社紀行 (23) 学習研究社 2003年4月24日発行 24~25頁参照
 王をかさせ 家門 繁栄・悪退散のお墨付きとなる

日本の伝説 20P
西の祭 102P
北九州の祭 108P

1分き 飛沫 10/10
電 70% 大勢が一瞬に
わめき立てる

2,576^P - 3/3

もっとも

湯気が立ちのぼるばかりに肉弾相撃って玉
の取り合い（玉せせり）をする。
人だかりの底に深く沈んでいた玉、直徑三
センチの玉は、時折、若者衆の上に現わ
れてきて肩車に乗った男の手に渡る。
その男が、玉を頭上高く差し上げると、一
せいに喊声があがる。沿道から撒き散らさる
若者達の裸体の上には、冷水が激しい波飛
沫のように降りかかる。
ほとばしる水、流れる汗、いよいよ熱気が
加わり、龍神の玉は道なかを右へ左へとゆれな
からせせり進む。
こうして、玉をめぐるの激烈な争奪戦が
繰り広げられてゆく。
この玉取祭では、途中経過がどうであろうと
最後に、誰か、天神天皇の手に玉を返す
か
か争われるのである。（「日本の伝説」(20)
西の祭り、世界文化社、一〇二頁。「日本社
寺大観」名著刊行会「宮崎宮」等参照）

あ2576^{P-1/3} 中280m
と書いた

2,577^{P-1/3}

「香椎宮・宮崎宮」24頁右に337^P ㊦2527^P
ルビ有る

恐らく、

辛卯年（三三一）

新羅の国の内奥にま

でも押一寄せていつた荒魂日潮満壇か敵

味方入り乱れ倭軍の兵達の頭上で大揺れに揺

れていたその戦闘の状況を伝える為にもそ、

一宮崎宮の異色神事日玉取祭（玉せせり）

と一て、現在もなお再現されつづけているの

うう

と思われ、現在行なわれている

て、次のようにいわれている。

玉取祭のときに用いられる玉は、神功皇

后三韓征討の時、竜神が干珠・満珠の玉を献

したとの伝えから、それを形どったといわれ

るが明らかでない。

祭日の正月三日の午後一時に、直径三〇セ

ばかりの男玉・女玉を神樂殿に移して、日お

玉洗い浄めらの式を行ない、末社の恵美寿神

社（玉取社）に供える。

日玉洗い式は、はじめて二個の木珠を湯で

洗い、次いで白絞油で洗い浄める行事である。

電
真珠

・カウー
・右頭の上
左頭、太鼓
はみ出17
掲載下21

2577^p - 2/3



284

1309 1409
香椎宮・笠崎宮 写真図版 422
神社紀行 (23) 笠崎宮 玉洗いの儀
1月3日の祭り当日は 玉洗いの儀に於いて陰陽二つの玉が洗い清められ境内から500mほど離れた茅社の玉取恵比須神社に運ばれる。
そこに待ちうけた競子らは、陽玉の奪い合いから本宮へ向かう。
最後に玉は高く掲げられて楼門下まで進み、神職の手に渡り、本殿にて玉納めの儀が執り行われる。

まよ 浄め 587 さんけい 587 さんけい 916 たま 珠 1395

2,577P-1/3

珠をふいた紙で子供の体をふくと病気に
 かないと言ひ伝えがあり、参詣者は争つ

てこの奉書をいたたく。

玉洗い式が終わるころ、海水で身を浄めた
 裸体の若者が社前をうずめる。

玉が、玉取社から再び運び出されて、女王
 は貝桶に入れられ、男玉は裸体の群水に投げ

入れられる。

むかしは、この勝敗によつて漁場網入水の
 権利を決めたといわれ、いまでも、岡部

馬出両部落の若者はこれをとうとうと教へ裸
 体の争奪戦を演ずる。

玉は、最後に神官に返される。

そして、玉を神官に渡した者が、そのとき
 の勝利者となり、その年の幸運と豊作を得る

といわれ、いさ

という。へ北九州の旅レ旅研社、初版、一

〇八頁参照

米

すうけいえ 日本社寺 534° 元神紀 362° 某解等は、蚊田を宇満、
崇教 1179 三大八幡宮 北九州の旗 107° 旧名とする。
……… 統志(經) 2 = 313, 580° (E)

コウヨ ケー20 20×20

③ そしてその後の延長元年(九二三)に、
 菅崎宮が現在地に創建された(遷された)、
 ということなのか、
 知らない。(要検討)
 は分らない。

＊

なお、
 玉取祭(玉せせり)は海と切
 り離せない祭事なのだから、
 海と関係がある。
 素

● なお、
 実戦において禪一つの裸であつたと
 は考えにくい。
 へ水を掛けられても、
 水が気にならないでよいとい
 うばかりでなく、
 勇猛果敢な心意気(いぎ)を示す為
 にも、
 禪を締めただけの裸で玉の
 取り合(あ)いをするようになったの
 ではないか。
 などと想像される。

＊

同文
「新」(1)-115F
紀上134P
紀国78P
332
239
100年

① 2422P 250年春に後佐進85
② 2484P 2579P
紀上124,125P

③ 2576P (4年) 2572P 辛卯年の3年前
333年に少彦名
後同に著くことなり。
紀上128P
紀小485P
④ 2519P 3/3 から
⑤ 2512P
紀上131P
紀国73P

大己貴と少彦名の談
おほあなむち
すくなひこな
ものがたりこと

紀上129P
18行

ト
それではここに、天上の国（九州地方）か
ら母国（近畿地方）へ降った少彦名の方の
様子を見てみることにしよう。
大己貴と少彦名とは、力を合わせ天下経
営に励み、領土の拡大に務めた。
そしていつしか、少彦名が母国（近畿地方）
へ漂い着いてから四年の歳月が流れていった。
それは、あるいは辛卯年（三三一）の翌年
（三三二）のことであつたろうか。
なお、素戔嗚尊の兄の五世の孫、葦根の
時代にはすでに、その領地は根国（難波あた
り）を中心として紀伊国一帯、奈良盆地、淀
川南岸域を包有するまでに大きくなっていたのであ
る。と想定してみた。神代紀上第八段「書第四」第五表
そんなある日のこと、今はもうすっかり
根国に居ついてしまつて、少彦名に向か
つて、大己貴（葦根）は「幾分我慢気にこう言つた

コクヨ ケ-20 20x20P
「新」(1)-113
2484P
1/2 系

「新」(1)-113 288

紀上128P 5行

2,580^P-1/2

紀上28^P~9^P
or 2582^P

「新」(1)-115^P

「吾等が造ったこの国は、はたして善く出
来た」と言えるだろうか

すると少彦名は、首を横に振り「さ
はこう答えた」

「出来た所もありますか、未だ出来ていな
い所もございます」

と答えた。

因みに述べると、日本書紀に神代上第八
段一書第六に、次のように記されている。

「大己貴命と、少彦名命と、力を戮せ心を
一にして、天下を経営する。」(中略)

大己貴命、少彦名命に謂りて曰はく、「吾
等が所造る國、豈善く成せりと謂はむや」と

のたまふ。少彦名命對へて曰はく、「或は成
せる所も有り。或は成らざるところも有り」と

のたまふ。是の談、蓋し幽深き致有ら

云々

日本書紀には、このように、実に意味あ
い

意味あり 2571

意味あり

意味

天つき 改行

2,580^P - 3/2 (ニ)

注 2571

至 57183 狭小 571^P 改行

「バリ」な書き方をしている。

「それにしては、出来た所、そして出来ていない所とは、一体、どういう意味なのだろうか。」

「いうまでもなく、大己貴と少彦名の二人の間では、」

「唯、このような言葉だけで通いあう談話だったのであろう。」

「しかし、現代の我々には、謎めいていて何のこともない。だから理解し難い。」

「とはいえ、大己貴と少彦名の会話の背景とみられる状況について、こう推察される。」

「もし、かゝらば、二人は、」

① 西の倭国の大きな領有地、

② 東の母国（旧出雲国）の小さな領有地、

の双方を較べていたのではないだろうか。

「つまり、倭国（北九州・山口地方）の」

「広大な領有地と比較して、」

「大己貴の国（近畿地方中央部）の狭小な地域を、出来た所、」

下へ

タイロ 新(1)
-115P
~116P

海
た

前2頁15行 2,581P 意味ありげな前頁15行

きょうほう
狭小 571P
天正改行

(12)

まだ 領有して

(口) いなり周縁部の地域を出来ていない所

と述べたのであろう

と思われ。

すなわち、

ハこの当時の倭国(北九州・山口地方)の

地形の上に、大己貴が領有している母国の地

形を重ね合わせると、ハ代平野・神山(阿蘇山)・菊

は小さくて、

池川南岸域一帯を含む程度の大きささかな

といった意味なのであろうと想到される。

こうしたわけで、少彦名は、

「出来た所もあるが、未だ出来ていない所

もある」

と對えたのではなかろうか(「荒筋」

第一編「出雲国の国造り」において既述)

*

see! 促す 203^{せまた} 56/5.15(金) 2593^目 2586¹¹ 2590² 2591¹

あや 怪 65³⁰ ひとがけ 21816^人 の姿

2.582^P

56/5.11(日) 292

恐小多い みたない あらた。

2586¹¹ 11^斤

か 無^な い の を 確^た か め る と 声^{こゑ} を ひ そ め て 言^い っ た^で

少^{すくな} 彦^{ひこ} 名^な は あ た り を 見^み 回^{まわ} し 不^ふ 審^{しん} な 人^{ひと} 影^{かげ}

う む 少^{すくな} 彦^{ひこ} 名^な 命^{いのち} よ 申^{まう} ー て み る が よ い

大^{おほ} 己^{おの} 貴^{おの} は 少^{すくな} 彦^{ひこ} 名^な の た だ な ら な い キ ャ と し

た 目^め の 輝^{かがや} き を 見^み て と る と 言^い っ て 促^{うなが} ー た。

い こ と が こ ざ い ま す し

少^{すくな} 彦^{ひこ} 名^な は 居^い 住^{すま} を 正^{ただ} ー て 言^い っ た。

っ つ き ま し て は こ こ に 是^ぜ 非^ひ 申^{まう} ー 上^あ げ た

て い た。

少^{すくな} 彦^{ひこ} 名^な は 居^い 住^{すま} を 正^{ただ} ー て 言^い っ た。

っ つ き ま し て は こ こ に 是^ぜ 非^ひ 申^{まう} ー 上^あ げ た

さ が す か し 次^{つぎ} の 瞬^{しゅん} 間^{かん} 少^{すくな} 彦^{ひこ} 名^な は 微^き 笑^{しょう} ー だ

ー か し 次^{つぎ} の 瞬^{しゅん} 間^{かん} 少^{すくな} 彦^{ひこ} 名^な の 態^{たい} 度^ど は 急^{きゅう} 変^{へん} し

ら の よ り 一^{いつ} 層^{そう} の 効^{けい} と も な る わ け で す か ら し

こ そ ー か え っ て 楽^{たの} し み な も の で す こ れ か

え よ う で ー 出^で 来^き て い な い 所^{ところ} が あ る か ら

あ た 許^{ゆる} せ よ し

自^い 慢^{まん} す る の は ま だ ま だ あ ま り に も 早^{はや} す き

さ う で あ っ た 少^{すくな} 彦^{ひこ} 名^な 命^{いのち} の 申^{まう} す 通^{とお} り た。

領^{うりやう} ー て 言^い っ た。

少^{すくな} 彦^{ひこ} 名^な の う の 言^{こと} 葉^は に ー 大^{おほ} 己^{おの} 貴^{おの} は 素^す 直^{ちく} ー

4 藤口北高から青銅輸入番2681の1/4。にては記さない。藤口北高に在りて

大己貴は、
長須を震わせながら、
少彦名を疑

「為には...」 逃げ 1741 1373 95国 64 2,583^P - 3/2 2590^{1/2} 105 2011 203^P

置いて言った。母国がなすべき二つのうちの一つは、倭国に朝貢して、海北九十五国平定の偉業を称え、そして盟約を結んでおくことです。勿論、ととなから、倭国王延鳥郎達に、このご感付かれています。密かに、倭国へ使者を送ることが肝要です。つまり、この小国母国は、国拘奴国との狭間を縫って生き延びてや、めん、拘奴国に決して悟られないよう、えん分

視していった。心の内に、領くところがあった。の、あろう。それでは、拘奴国崩壊の時に備えて、この東国・母国は、一体何をなすべきであります。ようか。そうです。母国の国王、葺根殿。――今、うちにごそ、この母国は、少くとも次の二つのことを是非とも実行しておかなければなりません。――少彦名は、ここで一息ついた後、やや間を

2,584^P

まあい ね 2061↑
習合 あいた、23あい

内容表 秋内容
この方 読者表
この方 告知表

すゐため 予め

吳の分國 ⑤532

⑤537-1/6 2,585P

盟約 2166
盟約 2166
盟約 2166

契 1423
契 1423
契 1423

勢 31493
勢 31493
勢 31493

驚嘆 574P
驚嘆 574P
驚嘆 574P

意外な事実に驚嘆するだけでなく、強敵拘奴国の
背後に、天照大神と血筋の繋がった味方を
得て、大いに歓喜するに違ひありません。
そしてさらに、倭国と母国とが、
をなして、盟約を交わし、
倭国が拘奴国討伐を開始した時には、
間髪をいれず、母国も東方か
と固く誓うならば、倭国にとって、それ以上
の喜びはありません。
ところで、その昔、周の成王が東方征伐を
行ない、揚子江に達した時、周軍の爲に大きな
働きをしたのは、太伯の後裔達でした。
そこでその功により、私達の祖先、周章は
は、呉の地に封じられ、弟の、虞仲は周
の北方の、虞の地に封じられたのでありま
した。第六章、呉国の台頭、参照
それから全く同じように、葦根の殷あるいは
貴方様の御子孫が、千載一遇の好機を逸せず
倭軍の爲に大きな働きをなし、輝
武

莊嚴 一層 133 促す 2586

25823 万止むない 1832

みす 見捨つ 214

たいとう 打倒 1387

2,586

勳を立てたならば、その時には太伯の後である
倭人達も、~~母国~~母国の存立を認めてくれる
のではないでしようか
少彦名の熱弁に、と耳を傾けていた大己
貴は思った。
へ祖国である倭国と共に兵を起し、~~拘奴国~~拘奴国
を打倒するとは、いわば我が母国の宿命と
いうべきであろう
大己貴は、自らの答に納得して大きく
うなづく。少彦名に先を促した。
少彦名は、一層熱を込めて語った。
倭国の都に上洛し、大極殿の前庭で朝献
の儀に臨むことになった。母国の使者は、
天上の国から追放されて母の根国へ天降った
~~素戔嗚命~~素戔嗚命の武勇伝を、
可能な限り華麗に、~~多岐~~多岐にわたって神
秘的に、倭国の
人々に披瀝してくるがよう、うございまし
よう。
一国の創成に至る歴史は、人の心を揺振ら

2,587-1/2

系図 とうそぼ ち1291^p
曾祖母 祖母の母 ちとへちね
2484 2605 ひいばば ね(里)57^p

次員
から

ないはずがありません。

こくに、この^{おのくに}母国^{はな}においで、すでに伝説化

して伝えられている^{やまたのうち}八岐大蛇退治の話など、

心おどるばかりに勇壮で、たとえようもなく

煌びやかであります

■とその時 母国王葺根のかたゆらにあつて

うつらうつらとまどろんでいるかと思えた

祖母の口^{くち}都度^{つど}開知泥^{あまのつど}（天^{あま}え都度^{つど}開知泥^{あまのつど}）が

口を開いてこう言つた。（第32表参照）

「まあ、良い考えね。葺根や倭国へ朝貢

あまのむらぐものつるま

を献上品としたらどうでしょう

なさるかよい。そうそう、あの日天叢雲剣

華震 偏境 2002P 使人 下1901P 2.587P 2/2 紀上12P 中の尾 記(四)56P 武名 小林 537P
 2586 17P

前頁

少彦名は言った。
 「それは実に理にかなったお言葉です。た
 かには、誠にあって恐れ多いことながら、八岐大
 蛇の中の尾を切った時に得たという霊妙な剣
 天叢雲剣がよろしいかと思われます。
 大蛇(大者)居る上に常に雲氣が立つという
 その剣は、素戔嗚尊の武名に、なお一層の威
 光を添えてくれるでしょう。
 「うむ。二人ともよく言うてくれた。そ
 の通りに致そうぞ。
 とはいっても、この母人(主人)達の中か
 ら、一体誰を、倭国への使者として遣わ
 のであらうか。
 長い間、偏境の土俗の中に身を潜めて
 うちに、麗美で莊重の上にもないと伝え聞
 倭国の礼儀作法を、悉くこころみ果ててしま
 へんまう 偏境 2002P
 がたいな 僻地
 使人 下1901P
 2.587P 2/2
 紀上12P 中の尾
 記(四)56P
 武名 小林 537P
 2586 17P

巻又 前頁 10P

前巻

2,588 P-1/2

使の旨 紀下190^{いた}
總大倭52^{いた}

もはやどのようにな振舞^{ふるま}つてよいやら分^わる者と
ていな^いのだから困^{こま}ったものよ^し
「そのことであたら、少しも御^ご心配^{はい}に及^{およ}び
ません。私^{わが}が、倭^わ国の都^{みやこ}へ詣^もり、使^{つかひ}の旨^{むね}を
言^ま上^うし述^のべて参^まりま^しよう^し。
「何^{なん}と^な、~~それは嬉^{うれ}しく有^{あり}難^{がた}い御^ご言^{ごん}葉^はな~~
が^ら……^{かし}倭^わ国^{こく}から客^{きやく}人^{にん}に倭^わ国^{こく}への
朝貢^{てうこん}をお願^{ねが}いするな^どという^ふ法^{ほう}が^ありま^しよ
うか^し」
降^{くだ}つてこ^られ^た

戦功 1263P
561.5.24 (木) ④

契 539P
561.5.24 (木) ④

「決意は」次頁新
2.588P - 3/2
天祥彦 267P
561.5.24 (木) ④

かたつた
語り伝ふ云425P
語り世人に伝える
561.5.22 (木) ④

「いえ、実を申せば、私は拘奴国討伐に出立の折、戦功をたてて倭国へ凱旋しよ」と心に誓ったのでした。それなのに我が軍は惨めな敗北を喫し、兵隊は散り散りになて行方も知水ません。いまさら、どうして私のみ、おめおめ倭国へ帰り安住など出来ましよう。曾ての、倭人としての私は、もうすでにあの戦いで死んだまゝなのです。私は、母人（毛人）になりきろうと

胸の内 決めております

とはいふものの、一方

私は、この奇跡の王国、母国のことや

早く、倭国へ報いなければならぬ

という義務感を覚えて仕方がありません。

そこで私・少彦名は、母人として倭国へ朝

献し、母国及び拘奴国の状況を語り

伝え、両国間の固い盟約をとり交わし、然る

後に再びこの母国へ帰って参りとう存します

大己貴は、少彦名の申し出を喜んで受け入

ひしを貸(て)母屋を取らぬ
三省省口清評 131
こまきや 時 426

2.589P

つた
継ぎ足す
元1479P

561.5.23金

紀上128P 49P 10行
2580P 1/2 ↓

心下191
心1158P
(241714)

喜ば(い)云
2293P

大い
の

2583P
- 3/2 3所

米

れようと思つた。
それは母国にとつて有難く、心強いこと
です。倭国の都へ詣り、朝貢の儀を無事にす
ませたら、是非、この母の根国へ帰っ
てきて下さい。心底より待っておりますぞ。
母国の国作りは大層な仕事で、ありますか
二人、力を戮せ心を一つにして、天下の欠けた
所を継ぎ足してゆくではありますせんか
大己貴は、心の内に滾るばかりの熱い思
を抱いて言つた。
それは母国にとつても、やがて訪れるであらう
拘奴国壊滅の際、東へ、母国にと
れ程の国力がついていゝと、大己貴の心は震え
た。
あつとも、罷り間違えは、実力格殺の差
大国倭国に、全てを奪い取られる恐れがあつた
。大己貴は、少考名の言葉を信
じ、倭国と手をつなぎ、目前に迫つた大戦の
時に備えよう、と決意した。

崇神記
記(王)136
記(崇)256

・大漢和12713
開は開に同じ
・開(人)記2591
949

2,590^P-1/2

紀上130^P
「つま」は2591^P

げんし
徹
こ

2710^P
おごそか
一休

おごそか
徹か
294^P
2583-36

今のうちに母国がなすべき更なる一つ

「一て、少彦名命よ。もう一つの事」とは

どのようなことであらうか。大己貴の目の中を射るか

のように鋭く覗き込み、そしておごそかな面持で答えて言った。

倭国には有るのに、この母国に無いもの。それは何だと思いですか。

必ずや国の中央に厳然として有るべきもの。いわゆる線麻呂であります。

「ハソ呂が無くて、どうしてこの国に繁栄が訪れまいようぞ。何よりも先ず、国のハ

ソをこそ作らなければなりません。尚、万巻一に線麻呂とあり、崇神

記には「開蘇呂」と記されている。大己貴は、まじまじと少彦名を見つめなが

ら、この男、何を言おうとしているのだろう

か。✓

21P
2632P

2,590P - 3/2

重鎮 1050P
金いおはえ

地震の神 青山 439P
島にみえりしう次更木
不害 2582P
21P

と、怪しんだ。

どんなに思いをめぐらせてみても、口へソ

か何を意味しているのか、さっぱり要領を得

ず、困惑するばかりであつた。

そこで大己貴は、こう尋ねた。

「~~阿蘇山~~の口国のハソとやらいうものは、は

てさて、一体何なのであろうか」

「はい。倭国の要とも、重鎮ともいうべき

倭国のハソとは、倭国の中心に

えて火を吐く、綜麻形の日綜麻山(神山)

阿蘇山)のことであります」

王の作ともいい、万巻一十九は、額田

綜麻形乃林始乃狭野榛能

衣介着成目介都久和我勢

と歌わねてゐる。

「うーて、口綜麻形を、ハソカタでなく、

ミワヤマと訓む説がある、という。ハ7萬葉

集(一)日本古典文学大系、岩波書店、二〇頁

注(九参照)

少彦名は、息を継ぐと、~~タタ~~続けて

こう言った。

2583-3/2 10頁
息つく
電回 吐く
息を吐く
順 3/2
更なる

均等
開蘇 2590⁰-1/2
1597

倭国が非常に良く治まっていますのは、何
 と云うても、偏にこの国の最中に日へソロを握
 え置いていけるからに他なりません。ま
 つまり、倭国の中心に天へ向けて火を噴く
 綜麻形があるからこそ、倭国はあんなにも揺
 るぎなく繁栄しているのであらうと思わ
 れます。
 とすれば、この倭国においても同様に
 あの閑蘇の山に相当する秀麗な山を選んで綜
 麻形と成し、山頂に火を絶やさないようにして
 崇め奉るがよろしからう。
 すなわち、この倭国にもへソ形の神山を造
 るのであります。神山を造って国造りに励む
 ならば、必おや天下は治まり、強大な力が得
 られる筈です。
 少彦名の言葉は、杖を帯びて続いた。
 倭国の要といふべき日へソロを造るの
 ために、今こそがまたない時機だと申せ
 ましやう。造るからには、真正正銘、本物の
 日へソロでなければなりません。
 「ほう。本物のへソロ……をかし」
 大己貴は訝しそうに言った。



「葦根君。私、こ水から急ぎ

邪馬台国の都

へまいる、朝貢の務めを果し次第、できるだ

け早く帰途についで、その折、

御神火の山口阿蘇山匹の火種をば、戴いて参

りとう存じます。

その神山の火は、この母国の青垣（生駒・

金剛山系）の東の山の上で、屹屹き赫赫とこ

とになるでしょう。（「記」）（大田主神、御諸

山の神を祭る）条。雄略紀七年七月三日条参

照）

そうです。この母国の人々も、国の最中に

聳える神山（三輪山）を仰ぎ見るとき、

御神火が燃えさかり、煙が棚引いている巖が

な様を拝せるとか出来るようになるのです。

神しい光を放つ神山（三輪山）の神を厚く

敬い、鄭重にお祭りすれば、どうして国成り

難きことがありましようか。

綜麻形の山口綜麻山匹（神山）を中心とし

て、母国は、一大飛躍の時を迎えるのです。

東国（伊勢国・美濃国・尾張国）を切り取り

2590-2/2 紀上130° 記(特)57

2,592°

2590-2/2 紀上130° 記(特)57 2592° 紀上472° 記(特)75° 紀上292°

早く加算4行

いっしょにせんせい

H30(2018)6.28(木) ~ 6.29(4回)
 令和2(2020)11.5(木) ~ 11.7(4回)
 記述) 15P
 伝(上) 130P
 煌煌 ひかりかがや
 工王
 ほう ほう 2018
 奉す うやうやに
 持つ

2,593P

期義の船旅 キーとした月の輝き
 次頁 2582P

境と接する 1289P

1/F 1/6
 1/6
 次頁
 目差す

北の海（日本海）に到り、そして西方に拘奴
 国の都へ迫るまでに、~~ハル~~の国土を駆けま
 よう。これは、決して夢などではな
 く、一日も早急に成さなければならぬこと
 なのです。
 ■ 少彦名の目は、キラキラ輝いて自信にあふ
 れ、その口調はゆるぎない確信に満ちていた。
 ■ 少彦名命の胸中、よく分りましたぞ。そ
 れでは、容易ならぬ旅となりまいようかい、
 邪馬台国の都へ朝貢の使者として上洛し、皆
 様によりよくお伝え下さい。
 ■ そして、朝献の任を果した後は、神山の
 御神火をば奉りて無事に再びこの母国へ帰還
 され、一國の最中のヘソというべき日線、
 やまの山頂に、その光り輝く神を祭り、煌煌
 と燃え上らせてほしいものです。
 ■ 頼み申します。
 おほあなあち ものくに
 ■ 大己貴は、母国の未来をしっかりと見つめるよ
 うな眼指で、領主ながら言った。
 *